

【論 説】

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡 — 戦中・戦後の長谷川如是閑 —

織 田 健 志

目 次

1. はじめに
2. ソヴェート友の会
3. マルクス主義との「決別」
4. 楽観と悔恨と再生
5. 国内冷戦による分断
6. むすびにかえて

1. はじめに

敗戦後の日本において、戦前から活躍していた自由主義知識人たちは、占領軍がもたらしたリベラル・デモクラシーの理念について、その普遍性を疑い、日本の歴史や伝統を擁護した。民主化の機運に水を差しかねない「保守的」な態度ゆえ、彼らは後続世代から「オールド・リベラリスト」と呼ばれ、敬して遠ざけられた。「オールド・リベラリスト」という呼称が、いつ、誰によって生み出されたのかについては判然としないが、この言葉を一躍有名にしたのは、大内兵衛「オールド・リベラリストの形成」(『中央公論』1949年7月)である。高野岩三郎を追悼したこの論稿で、大内は次のように述べている。

戦後においてわがジャーナリズムは戦前以来の論客のヴェテラン長谷川如是閑、馬場恒吾というような人々にオールド・リベラリストというレッテルを貼った。幾分の尊敬と幾分の軽蔑とをこめてのことと思われる。そして彼等は高野岩三郎をもこのうちに数えたのである。⁽¹⁾

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

如是閑らが「オールド・リベラリスト」として軽蔑されることになったのは、敗戦によって社会状況が激変した結果であり、致し方ないことである。若手世代の態度について、大内はこのように理解を示す。その一方で、1888年生まれで、自身より一回り年長の如是閑らに対し、彼は尊敬の念も抱いていた。「多年にわたる彼等の出处進退を通して見るところの思想の堅実さ、最善の意味におけるコンサーヴァティズムに対しては、私は大きい敬意を表せざるをえない」⁽²⁾。

とはいえ、敬意を払うのと賛同するのは、むろん同じことではない。確かに、大内は「オールド・リベラリスト」の道德性を称揚し、その「思想の堅実さ」に共感した。しかし、彼らの「コンサーヴァティズム」から導き出される政治姿勢、具体的にいえば、マルクス主義や政治的革新に対する嫌悪は、マルクス主義者の大内にとって、納得できるものではなかった。高野岩三郎に対する高い評価は、そのことを裏書きしている。大内によれば、他の「オールド・リベラリスト」と決定的に異なり、「徹底的に社会主義者であった」高野は、この点で例外的な存在であったという。

彼〔高野岩三郎——引用者註〕は本来の意味でのプロレタリアではなく、またマルキストでもない。しかしオールド・リベラリストとして何故に最もラジカルな主張に同情をもち、それに対して十分の理解と共鳴をおしまなかつたかというならば、それは近代のプロレタリアートの地位、それについての彼の学問的実証的認識が、彼のヒューマニズムをそこまで延長させたからだということができよう。⁽³⁾

高野が例外であるならば、「オールド・リベラリスト」と呼ばれた人々は、「ラジカルな主張」や「プロレタリアートの地位」に対する理解と共感を欠いていたといえる。じじつ、急進的な社会変革やマルクス主義に対し、彼らは冷やかな態度を、時には敵対的な姿勢さえとったのである。大内が「オールド・リベラリスト」の代表格と見なした如是閑も、当然そこに含まれる。『日本ファシズム批判』（1932年）に代表される鋭利な国家批判によって、1930年初頭には「左翼論壇の雄」と目されていた如是閑は、いったいどのようにして「オー

ルド・リベラリスト」へと変貌したのか。本稿では、戦中から戦後にかけての如是閑の思想と行動について、マルクス主義との距離感、およびマルクス主義者との関係をめぐって逡巡する彼の姿を通して明らかにする。

2. ソヴェート友の会

1933年11月22日、如是閑は共産党シンパの嫌疑で警視庁中野署に召喚された。労農救援会（モップル）への資金援助について取り調べを受けたが、その日の深夜に帰宅が許された。そして、召喚から3週間ほどたった12月15日、東京日日新聞に寄せた談話で、如是閑は次のように述べている。重要であるため、少々長いが煩を厭わず引用する。

元来僕は合理主義者で、「断じて法を犯さず、犯せば必ず罰を受ける」といふモットーによつて従来もまた将来も行動することを期している、〔中略〕社会批評家としては生活態度はむしろ峻烈すぎるほど自己規定しないと批評の良心が保たれない、この頃は世間一般が極めてルーズで自分の行動を厳格に規定することはやらないやうだ、これで共産党の反対者が却つてシンパの役割を演じるといふことさへあり勝ちだ、また主義のためには友人が友人を陥れたり、後輩が先輩を欺いたりするなど盛んに不都合なことが行はれる、しかし友人同志が信用することが出来ず隣人互に疑ひ合ふやうなことになったら社会は一体どうなるのか、〔中略〕共産党よりも何よりもこれが根本的な大問題である、かうなつた責任はどこにあるだろうか、これは殊にいままでの道德教育の欠陥によるもので識者は留意しなければならないと思ふ⁽⁴⁾

読者を——さらには当局や仲間をも——煙に巻く気味があり、真意は判然としない。しかしこれ以後、如是閑の文章から犀利な批判が影を潜めることになったため、この談話は事実上の「転向声明」と見なされてきた。このような見方を方向づけたのは、山領健二「ある自由主義ジャーナリスト」（1959年）である。如是閑存命中に発表されたこの論稿で、山領は如是閑の「転向」の出発点として、この談話を位置づける。すなわち、如是閑は「共産党の反対者」と宣言して唯物論研究会から遠ざかり、マルクス主義と距離を置くことにより、

「当時の状況を正確によみとって批判する力を次第に弱めて行った」。それだけではない。マルクス主義との「絶縁」は、如是閑の「思想の本質」に重大な影響を及ぼした。なぜなら、「マルクス主義をも含めて学ぶべき者を学び、協力できるものと協力していこうという彼の自由主義的な立場が崩れた」からである⁽⁵⁾。そして以降、「権力の側によって恣意的にずらされていく合法と非合法の境界線」⁽⁶⁾に沿う形で、如是閑はなし崩し的に時局に追隨してゆくことになる。

もとより、先の談話の文面から明確に理解できるのは、如是閑が「合理主義者」⁽⁷⁾を自認し、それゆえ当時非合法であった共産党の支援をすることはあり得ないと弁明していることのみである。自身を「共産党の反対者」と「宣言」しているわけではないため、彼が直ちに「反共」「反マルクス主義」に転じたとは、この談話からは断定できない⁽⁸⁾。あるいは、如是閑には元から自身が共産党シンパであるという意識はなく、そもそも彼はマルクス主義者ですらないので、「転向」には当たらないということも可能であろう。

如是閑が「転向」したか否かについては、「転向」概念の定義によって、さらには思想のどの部分に注目するかによっても、評価が分かれる⁽⁹⁾。だが、中野署への検束がきっかけとなり、如是閑がマルクス主義から自己を切り離そうと意図したことは、確かである。マルクス主義にもっとも接近していた1931～32年ごろ、如是閑は日ソ文化交流を目的としたソヴェート友の会（第一次。後に日ソ文化協会と改称）の活動に深く関わっていた⁽¹⁰⁾。そこで親しく交わった人物に、劇作家・児童文学者の秋田雨雀がいる。雨雀は克明な日記を遺しているため、それを手がかりに、如是閑の同会との関わり、およびマルクス主義との「決別」の様子について確認しておこう⁽¹¹⁾。

ソヴェート友の会は、山本宣治の従弟で医師の安田徳太郎、哲学者で共産党員の加藤正、秋田雨雀らが中心となり結成された文化団体である。左翼運動の下部組織ではない、日ソの文化交流を目指す民間組織の必要性を説く安田が、雨雀に相談したことが、発会のきっかけであった⁽¹²⁾。雨雀の日記によると、1931年6月1日より複数回、同志を囲んで準備会や相談会を開いたが、当初より官憲に警戒さ

れていた。6月17日の準備会には四谷署員が突入し、雨雀と加藤を含む5名を検束した。翌18日夕刻に解放され、19日には雨雀と加藤が警視庁を訪れ、合法的な文化団体である旨を伝えて、当局の了解を求める事態となった。一騒動に見舞われたが、27日には無事、発会式の開催にこぎつけた。発会式には80名ほどの出席があり、如是閑は司会を務め、秋田雨雀が会長に推薦された(Ⅱ-254)。同会には経済学の大塚金之助、憲法・ソビエト法の山之内一郎といった非共産党系のマルクス主義者も賛同しており、如是閑は彼らと並んで名を連ねることに、少なくともこの時期には何ら躊躇がなかったのである。

それだけではない。如是閑は会長の雨雀を支え、同会の活動において主導的な役割を担っていた。7月2日夜には、東中野にあった如是閑の自宅で「相談会」が開かれ、岩波書店との交渉や雑誌出版について協議された(Ⅱ-255)。その後もたびたび、如是閑宅に参集して会合が開かれていたようである(1931年7月13日条：Ⅱ-255, 7月25日条：Ⅱ-258, 9月10日条：Ⅱ-265, 1932年2月18日条：Ⅱ-285)。9月14日には、友の会の中心メンバーとして、雨雀や加藤らとともにソ連大使館の招待を受けている(Ⅱ-265)。その他、友の会婦人部の会合や関連するイベントにも顔を出している(1931年9月30日条：Ⅱ-268, 1932年1月29日条：Ⅱ-282)。

とはいえ、これらの事実を以て、如是閑が共産党のシンパであったとは、むしろ断定できない。そもそも、ソヴェート友の会は文化団体であり、共産党の下部組織でも国際共産主義運動の出先機関でもない。雨雀は会長として、同会が政治団体とならないように腐心していた。発会当初、彼は日記に以下のように記している。

この会を最も実質的なものに育てあげるといことはそれ自身立派な成功だ。もしこの会が左翼的偏向をするときこれは明らかに失敗したものである。イデオロギーのインターナショナルでなく、どこまでもソヴェートにたいする友情関係に立つものであることを主張してゆかなければならない。(1931年6月30日条：Ⅱ-254-255)

しかし、雨雀の意図に反して、ソ連当局は、「世界で最初の社会主義の祖国ソ連を、資本主義諸国の攻撃から守れという国際的政治団体」としてソヴェート友の会を位置づけていた⁽¹³⁾。そのため、1932年2月10日の幹事会で、「インターナショナルの友の会でなく、文化連絡の文化団体」であることが再確認され、新たに常任理事として雨雀と如是閑を含む6名を選出した（II-283）。4月に入ると、会長の雨雀が「左翼的」ということで辞任を求める声上がり、如是閑と相談のうえ、雨雀は会長から退いた（1932年4月15日条、4月19日条、4月21日条：II-293-294）。安田徳太郎の回想によれば、如是閑を会長（筆頭常任幹事）に立てることで、会の再出発を図ったという⁽¹⁴⁾。だが、ソ連当局の意向を受けて、労働者・農民のイニシアティブで新たなソヴェート友の会を設立する機運が高まり、9月23日に第二次ソヴェート友の会が発会することになった（1932年8月22日条、8月23日条：II-307-308、9月9日条、9月23日条：II-310-312）。ちょうどこの頃、純然たる文化団体を志向した元の友の会は「日ソ文化協会」と改称し、雨雀は新たに発会した政治的色彩の強い第二次友の会から距離を置くようになった⁽¹⁵⁾。如是閑も雨雀と行動を共にしたようである。そしてこの間も、如是閑は友の会主催の作家ピリニャーク歓迎会（1932年5月27日条：II-299）をはじめ各種講演会で司会を務めており（1932年9月25日条、9月27日条：II-312、11月14日条：II-319）、「同伴者」⁽¹⁶⁾として積極的に運動にコミットしていたことが窺える。

3. マルクス主義との「決別」

ところが、1933年に入ると、雨雀の日記に如是閑の名前はほとんど見られなくなる。同年1月に死去した堺利彦の葬儀を別にすれば、次に登場するのは、中野署に召喚されるおよそ1か月前の10月19日である。「反ソ気分のために協会は困難におちいつている。長谷川如是閑も小野俊一も出て来ない」（II-363）と、雨雀はこぼしている。この間、唯物論研究会の創立記念第二回講

演会（1933年4月10日）で、如是閑が挨拶を始めるや否や本富士署長により解散させられるという事件があり、彼は唯物論研究会を退会することになる⁽¹⁷⁾。この頃には日ソ文化協会からも足が遠のいたようである。雨雀との関係も疎遠になったのであろう。如是閑が中野署に召喚されたことも、東京日日新聞に掲載された談話についても、雨雀は何も記していない。

思えば、山内光（岡田桑三）の送別会の帰り、銀座の資生堂で雨雀と二人で語り合った如是閑は、「どこまでも文化人として働いて行く」（1932年10月16日条：Ⅱ-314）と宣言していた⁽¹⁸⁾。「断而不行」が口癖だった如是閑が、それを押してまで左翼文化運動にコミットしたのは、「アンチ・ファシズム」の思想的行動という、「文化人」としての使命感からであったと思われる。しかし、社会の隅々まで政治が浸透する「社会の政治化」⁽¹⁹⁾が進行する当時において、「文化」と「政治」を切り分けることは不可能であった。如是閑が共産党シンパとして検束されたのは、その象徴的な事例であった。病弱の如是閑にとって、長時間に及び取り調べは、肉体的にも精神的にも苦痛を伴ったであろう。自己の発言の自由を守るため、権力から圧迫を受けるマルクス主義から距離を置こうという意図も、おそらくはあったであろう⁽²⁰⁾。だが、如是閑をもっとも困惑させたのは、マルクス主義との接点をもつこと自体が政治的行為と見なされるという事実であった。「社会批評家」として「峻厳すぎるほど自己規定」してきた彼にとって、政治的实践に身を投じることにつながる行為を、たとえ消極的であったにせよ、容認できなかったことは想像に難くない。かくして、如是閑は以後、左翼文化運動から離脱するとともに、マルクス主義との関係を「清算」することになる。

共産党シンパの嫌疑から数か月後の杉山平助との対談で、如是閑はマルクス主義との関係を質されたさいに、次のように答えている。「マルクス主義といふけれど、わたしにはマルクス主義つていふものはよく分からないのだ、第一に、あの唯物弁証法といふものがわたしには其まゝ受けいれられない」。この回答に杉山は、「おや、長谷川如是閑が、われマルクス主義を知らずと云ふ。これは異様なことを承るものかな」と内心釈然とせず、なおも食い下がる。しかし、如

是閑は「英国風の実証主義的傾向」こそが自分の核心であると主張し、「ドイツ哲学の一般の観念的傾向」をもつマルクス主義への違和感を表明する⁽²¹⁾。マルクス主義との接点を頑なに認めない如是閑の態度に、杉山は以下のような感想を漏らしている。

これは冷静に考へれば、長谷川氏としてはたしかに正直な本音に相違あるまい。たゞこれだけのことを、あのマルクス主義全盛の頃に、なぜもつと強く主張されなかつたといふことゝ、あの頃にはマルクス主義の同類項として扱はれても、あまり厭な顔をされなかつたことゝを、いさゝかくすぐつたく感ずるのみである。⁽²²⁾

実は杉山自身も、如是閑を「マルクス主義の同類項」と見ていたふしがある。雑誌『新潮』の同じ号に掲載された如是閑と土田杏村の「大衆」論を対比しつつ、彼は述べている。「長谷川氏は大衆なるものゝ意義をあくまでも組織されてゆくプロレタリアートの意味に於て理解せんとし、土田氏は無組織プロレタリアートのうちに、大衆なるものゝ意義を確認せんとする」⁽²³⁾。じっさい、如是閑は「階級的特権の打破に向つて、暴力的から組織的へと運動を進めて行ったものが、即ち「大衆」なのである」⁽²⁴⁾と述べており、階級意識論のヴァリエーションの一つとして杉山が理解したのも、納得できるだろう。外交官出身で評論家の柳澤健も、如是閑が「あらゆる問題を一々経済関係乃至は唯物的環境に持つて行く」ことに懸念を表明する。彼は如是閑に「往時相当の尊敬を抱いてゐた」が、マルクス主義全盛の時流に棹差して「左翼論者にありがちの現実無視の公式」を振りかざす現在の姿に「幻滅」したという⁽²⁵⁾。柳澤の眼に映る如是閑も、やはり「マルクス主義の同類項」であった。他方、マルクス主義者にとって、如是閑はあくまで「自由主義者」であった。青野季吉は如是閑を「徹底した自由主義者」としたうえで、その「批判」が「マルクス主義の『論理』に於いて、マルクス主義の『言葉』に於いて、述べられてゐる」ため、「批判と実践とが分離してゐるに拘らず、それがマルクス主義的に結合されてゐる」。これが如是閑の強みであり、言論界の「第一人者」となった所以であ

る⁽²⁶⁾。戸坂潤も如是閑を「ブルジョア・リベラリズム」の思想家と規定していた。とはいえ、政治的实践が彼我の思想的立場を分かち基準であると単純に考えていたのかというと、そうではない。如是閑の思想における「唯物論的」傾向と、それにもかかわらず彼が唯物弁証法を受け入れなかった理由について、戸坂の鋭敏な知性は気づいていた。『日本イデオロギー論』（1935年）の結論部で、彼は以下のように記している。

氏〔如是閑を指す——引用者〕の思想態度は極めて「唯物論的」である、と云うのは氏は実証的な常識以外に何等の哲学をも認めないのである。彼の思考組織がそのものとして取り出されることを氏は好まない、そうした哲学が、論理が、嫌いであるように見える。その癖氏の思想のやり口には一定の顕著な組織があるのであって、それが一貫した特色として誰の眼にも一眼見て判るように出来ている。ただその論理組織を自覚的に展開することが、何等か観念的な態度に墮するものと信じ切っているのである。氏の唯物論が弁証法の実際上の有用性を認めず従って弁証法的唯物論に移らない理論的な根拠はここに横たわる。⁽²⁷⁾

杉山との対談の直前の1934年2月、如是閑は雑誌『批判』を無期休刊とした。前身の『我等』創刊から15年の節目であった。以後、読売新聞夕刊の「一日一題」欄で、細々と時評をつづける傍らで、言論活動の軸を日本文化論へと次第に移してゆく。かつての「左翼論壇の雄」が日本の文化的伝統を肯定的に論じる姿は、当時の言論界でも驚きを以て受け止められた。「日本的性格の再検討」（『改造』1935年6月）をめぐって、ある論者はいう。「長谷川如是閑の日本的性格の再検討は、内容はとにかくにして、この仁までがかう云ふ方面に注意が向いたかと、そぞろにももの哀れを感じさせるものだった」⁽²⁸⁾。もっとも、この如是閑評では、「日本的性格の再検討」自体が必ずしも「保守的」な試みではないとしており、またそれを以て如是閑の「転向」とも見なしていない。如是閑の著述からマルクス主義の用語が消え去ったのは、確かにそのとおりである。だが、彼が「同伴者」あるいは「マルクス主義の同類項」と目されていた時期においてでさえ、マルクス主義が思想の中核を占めていなかった

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

ことは、戸坂が鋭く見抜いていたとおりである。じじつ、滝川事件を俎上へのせ、ナチスの焚書に対する抗議運動の発起人となった1933年当時から一貫して如是閑の根幹を成していたのは、思想の自由と多様性の擁護を核とする「自由主義」的思考であった。

政治の一元化といふことは、だから国民生活の多元性を無くするといふことではなく、益す多元的となる内部生活に伴ふ政治の多元性を、国家的に一元化される過程である。〔原文改行〕然らば政治の一元化は、必然に生活の多元性を条件とするものであり、生活の多元性はまた必然に生活意識の多元性をも来し、思想、学術、芸術その他社会的所産の多元性となる。要するに生活の多元性がなければ、政治の一元性もなく、国家社会の進歩発展もあり得ない。⁽²⁹⁾

とはいえ、思想の一貫性をことさら強調することで、マルクス主義との「決別」が如是閑に及ぼした影響を過小評価すべきではない。三谷太一郎が推測したように、共産党の影響力が強い左翼文化運動と積極的に提携することにより、如是閑は「アンチ・ファシズム」の核を準備しようとしていたと考えられる⁽³⁰⁾。「毎日の新聞はファッション論で持ちきりだ。長谷川如是閑君は反ファッションで大いに戦っている」（1932年3月3日条：II-287）という秋田雨雀の感慨も、そのことを暗示しているだろう。そうだとすれば、マルクス主義と自己を切り離したことは、「アンチ・ファシズム」の共同戦線という如是閑の戦略が「挫折」したことを意味していた。ともあれ、1933年末における中野署への召還とその後の談話が契機となり、如是閑とマルクス主義者との連帯が断たれたことは、確かである。そしてその後、戸坂潤がいみじくも予見したとおり、弁証法を認めない「未発展な唯物論」がさまざまな「観念論的な動揺」を引き起こし、その結果、如是閑は「ファシストのレッテルを貼られる」ことになる⁽³¹⁾。

1937年2月、文化勲章が制定された際に、如是閑は読売新聞に談話を寄せている。「かういう時機に於て特に文化に対する関心を国家がもつといふことは欲ばしいことである」。そして、上は朝廷から下は庶民まで文化の懸隔がない「全国民的文明」という、如是閑が「日本の性格」として力説していた主張を

引きつつ、「現下の問題として国民の文化的関心を強めるといふ事が最もいゝ事である」と締めくくっている⁽³²⁾。かつて親密な関係にあった秋田雨雀は、「長谷川如是閑の態度」と欄外に記しつつ、日記に綴っている。「文化勲章のことが話題になっている。長谷川如是閑などが多に讃美しているようだ。〔中略〕政治的意味をもっている」(1937年2月10日条：Ⅲ-128)。文化勲章制定のきっかけは、首相の広田弘毅が国威発揚を目的として閣議で提案したことであった。このことは当時の新聞報道からも明らかであり⁽³³⁾、文化勲章に手放して賛成する如是閑を、雨雀が指弾したのは、いわば当然であった。また、植民地問題の研究で知られた細川嘉六は、「世界史の動向と日本」(『改造』1942年8～9月)を発表した当時について、後年、以下のように回想している。「長谷川氏は言論界の長老ということであるが、この時は、天皇制軍国主義に酔いしれ狂人めいていた蓑田胸喜の尻馬にのって、世界の科学界に特別な「日本学」を建立しようとしていた」⁽³⁴⁾。

1940年9月末を以て、読売新聞の「一日一題」欄が廃止され、如是閑は時事評論の筆を折った。暗くつらい戦時下、如是閑は以前からの知友の馬場恒吾・清沢冽・石橋湛山ら「自由主義者」が集う「二七会」⁽³⁵⁾で、彼らと交流を深めた。また、嶋中雄作と清沢が中心に組織した国民学術協会で、佐藤一斎の研究に打ち込むことになる⁽³⁶⁾。

他方で、1942年5月に結成された日本文学報国会において、如是閑は三宅雪嶺・桑木巖翼・竹越與三郎とともに名誉会員に推され、1944年4月には評論随筆部会の部会長に就任する。この頃になるとさすがの如是閑も「大東亜戦争」を容認する発言が目立つようになる。「大東亜会議とその共同宣言とにおいて、大東亜民族は、わが日本を指導者として、東方文明を中心とする世界文明創建への第一歩を現実に踏み出した」⁽³⁷⁾。とはいえ、英米文化が敵性文化として排斥される時世に、「東方文明の特徴と西方文明との特徴が互に反発せず、相協力し」て一丸となることを「大東亜文化の根本義」と説くなど⁽³⁸⁾、戦争遂行に心ならずも加担するきまりの悪さも窺える。なお、清沢冽『暗黒日記』によると、1943年11月26日に清沢・小江利得・

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

石橋湛山・高橋亀吉・石山賢吉らとともに青木一男大東亜相と、翌44年8月14日には清沢・高橋・馬場恒吾・石橋湛山とともに町田忠治國務相とそれぞれ面会しているのが目に付くが⁽³⁹⁾、大勢に影響を与えることはなかったようである。

4. 楽観と悔恨と再生

1945年5月26日の東京大空襲により、如是閑は蔵書約4万冊を含む家財一式を失った。焼けた本は部屋数の同じ9つの白い山を成し、10日余りも燃え続けたという⁽⁴⁰⁾。秋田雨雀らソヴェート友の会の仲間と語り合った東中野の邸宅も、灰塵と帰した。「大東亜戦争」が終結するのは、それからおよそ2か月半後であった。

敗戦の年、如是閑は齢七十に差し掛かろうとしていた。この年の暮れ、彼は二つの論稿を発表している。一つは「敗けに乗じる」（『文藝春秋』1945年12月）であり、いま一つは「日本民族の不合理性」（『新生』1945年12月）である。前者は『文藝春秋』に見る昭和史』や『長谷川如是閑集』（岩波書店）に採録され、今日でもよく知られている論稿である。他方、後者が掲載された『新生』は、戦後の混乱期に創刊され、一世を風靡した雑誌であったが、今日では忘れ去られた感がある。如是閑が寄稿したこの論稿も、著作集やアンソロジーに収録されたことはなく、如是閑を論じた文章でもほとんど言及されてこなかった。

対照的な二つの論稿のうち、まずは著名な「敗けに乗じる」について確認しておこう。戦時中、軍部や官憲の号令に従い、「言ひたいことは言はず、為たいことも為ず」という「一億一心」でいた日本国民だが、敗戦後には「言ひたい事、為たいことは何でもいひ、何でも出来るやうになつたつもり」の「一億億心」ともいうべき状況である。急激に反転してゆく世相と「浮調子に似た」軽薄な態度。それはジャーナリズムの姿勢にも見られた。当局の弾圧を恐れて爪弾きにしたかつての「危険思想家」を、敗戦後は一転して持て囃すジャーナリズムについて、如是閑は痛烈に批判する。「うつかり手をその人達にのばさなかつたのなら、たとへ手をのばし得る時が来ても、少しは終戦直前までの自分

達を顧みて、その人達へも、世間へも、遠慮するのが礼儀でもあり良心的でもあらう」。さらに、かつての「危険思想家」に対しては、「相当思慮分別があるならば、〔中略〕矢鱈と手を引張られたといつて、すぐといゝ気で乗り出せるわけのものでもあるまい」と苦言を呈する。また、敗戦による「精神文化面の解放」についても、「わが国の文化人自体が身をすてゝ」獲得したものではなく、「勝利者の意図で、天降り式に与へられたもの」に過ぎないと手厳しい。「自由主義」や「民主主義」も、「敗けに乗じる」姿勢でもって「濫用消費すべきではない」。「社会主義、共産主義に至つては」なおさらそうである⁽⁴¹⁾。

ジャーナリズムの無節操ぶりに痛棒を食らわす一方、敗戦後に一躍脚光を浴びることになったマルクス主義に対する敵意が、そこはかたく感じられる。ちょうどこの頃、金森徳次郎らとともに日本自由党の政務調査会顧問に就任したことも併せて考えれば（『読売報知新聞』1945年12月22日）、如是閑の当時の立ち位置が窺える。今日、「戦後民主主義」に批判的な論者によってこの論稿がしばしば言及されるのも、決して偶然ではない。あるいは、マルクス主義と「決別」したことを正当化し、「大東亜戦争」下での自身の行動に対する開き直りにも似た態度を、見て取れるかもしれない。年が明けた1946年1月、馬場恒吾と対談した際にも、日本人は「温室育ち」であり、「今度はじめて取けた経験を得た」ことは「非常に尊い経験であり、ありがたい経験であり」、「敗戦国でこんな暢気な敗戦国はないね」と発言している⁽⁴²⁾。また、別の場面では、「官僚や軍部が悪い悪いといふのが国民も悪い、自分が跋扈させておいてそれをたゞ悪い——といふのは無責任だ、国民の側にも責任がある」⁽⁴³⁾とも述べている。如是閑のこのような態度が、マルクス主義者はいうに及ばず、戦争体験を重く受け止めていた若手世代からも反感を買ったことは、想像に難くない。

だが、戦争体験に対する「悔恨」が、如是閑に全くなかったのかといえ、そうではない。文学者の「戦争責任」を論じた文章で、如是閑は以下のように述べている。

多くの人民は勿論、特に自分を顧みて見ればわかることだが、いかに反対した戦争

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

でも、現実勃発した以上は、自己の、また日本の、存在を守るために、もはや事の良否も、成否がどうあらうとも、それに協力して、おのれと日本とを保存しなければならないと思ふ気分に駆けられざるを得ないのが、一般の傾向であつた。⁽⁴⁴⁾

日本文学報国会の評論随筆部会長であつた如是閑にとつても、むろん他人事ではなかつた。国民やジャーナリズムの「浮調子」への警告という「敗けに乗じる」の論調とは対照的に、雑誌『新生』に寄稿した「日本民族の不合理性」では、自身の反省も交えながら、敗戦の要因と「戦後」の課題について論じている。日本人は「歴史的に見て、不合理性に走る危険性の比較的少い民族だと信じて居」た如是閑にとつて、敗戦による破局は予想外の事態であつた。満州事変の勃発を予見できなかったことについて、如是閑は「悔恨」の念を込めて次のように振り返っている。

満州事変がまさに起らうとして、日本の国内の一部のものの中に不穏な空気が醸醸されてゐた当時、私は、日本の支配階級は戦争を起さないといふ意味のことを、当時の時事新報に数回に亙つて書き、その後更に「改造」にも同じ意味のことを書いた。然るに、その「改造」の十月号が九月十八日に発行された。その日に満州事変が突発したのであつた。それで私は、私のやうに碌々世間にも出ない書齋人が原論的見地から、実際問題に触れる危険を痛感して、爾来、政治論の筆を絶つて今日に及んだ。⁽⁴⁵⁾

軽工業や非軍需の重工業中心の日本の財閥は、戦争により軍需生産を強いられることで利潤が減退するため、「戦争回避の立場をとる」と思われた。だが実際には、財閥の意向に沿うほど日本の政治は「近代化」しておらず、「封建的性格」が残存していたため、軍部が国民の意思を無視して自らが望む方向へ突き進んだ。とはいえ、日本人が「合理性」を堅持していたならば、一連の戦争は起きなかつたであろう。日本を破局へと導いたのは軍部の暴走ではない。「日本民族の性格にある、やゝもすれば不合理性の誘惑に陥る性向にこそほんとうの責任がある」。将来、同じ過ちを繰り返さないためには、日本人の

「民族的性格を根本的に改変せしめる努力をしなければならない」。もっとも、「不合理性」は人間の心理に深く根差しており、「合理主義者」が考えるように、「単なる理知の力で不合理性を克服することは出来ない」。したがって、「不合理性の作用」を「人間的」および「民族的」の生存に適する「心的又身的の教養をもつことが、現実の個人的又民族的生活の上で肝要」である⁽⁴⁶⁾。

自身の反省を綴ったゆえであろうか、明快な文章とはいえないが、敗戦当初の如是閑の心情と「戦後」の自らの思想課題について、この論稿はよく伝えている。日本人の「民族的生存」に適する教養については、戦中以来のライフワークの「日本的性格」論を戦後も継続することになるが、本稿では取り上げない⁽⁴⁷⁾。ここで注目したいのは、日本の「近代化」が不十分であり、「封建的性格」が色濃く残っているという認識である。如是閑によれば、「封建時代」の終焉後にも「国家的」あるいは「社会的」生活の内に残存している「封建的意識」は、「近代的生活のアンチセシスをなしてゐる」。それは、「近代的生活」が発展する「障碍」となる一方、「近代生活の短所を制約する作用」をもつこともある。明治維新を経て、日本は「封建国家」から「統一的国民国家」へ生まれ変わったが、清算されずに残存した「封建的意識」は、もっぱら前者の側面が顕著に現われて「国家的生活」に悪影響を及ぼした。その結果、「封建的構成を支持する」軍閥と官僚が、「人民の総意を無視」して国家の動向を決定することが常態化した。人民にも「封建的意識」が根強かったため、彼らの意思や感情に反するにもかかわらず、軍閥や官僚の決定を「国家的動向として承認する」に至ったのである⁽⁴⁸⁾。

ところで、近代日本に深く根を下ろしている「封建性」の克服は、「平和にして自立的な民主主義国日本建設」⁽⁴⁹⁾を目指す知識人にとって、共通の思想課題となり得た。1946年3月10日、山川均が提唱した「民主人民戦線」が発足する。労農派の論客であった山川をはじめ、野坂参三（共産党）、細川嘉六、荒畑寒村（社会党）といったマルクス主義者のみならず、石橋湛山や三浦鍬太郎ら自由主義者も党派を超えて結集した。如是閑も彼らとともに世話人を務めた⁽⁵⁰⁾。発足に合わせて、雑誌『改造』1946年3月号では、如是閑と山川の対

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

談「人民戦線を論ず」が掲載された。山川によれば、敗戦後の日本では、社会党と共産党以外の「民主主義的な勢力」が組織化されていない。そのため、「民主主義勢力の大同団結」、すなわち「日本の運命を担ふに足る大きな民主主義的な中心勢力を形造らう」という意図の下、「人民戦線」を呼び掛けたという。したがって、それは「一党一派の運動」でも「階級運動」でもないとしている⁽⁵¹⁾。これを受けて、如是閑は「旧勢力を擁護する自由主義」や「資本主義を擁護する自由主義」を標榜して、社会主義政党が展開する民主化運動に背を向ける態度を批判する。「日本の自由党」は「資本主義政党を標榜」しているが、「日本でも今日、自分達は資本主義を擁護するから資本主義打倒の政党とは協同出来ない、そんな看板を固守してゐるのは、われへ国民の眼から見た時に、政党として又政治化としては無意味であり、錯誤である」⁽⁵²⁾。そして、民主化に反対する守旧派や戦争を遂行した「残存勢力」の再結成に対する警戒感をもちつつ、以下のように発言している。

残存勢力の今の存在——分散的の形式はこれは已むを得ない。それが再生産されるのを防ぐことを、これ亦科学的に、具体的に考へて、ときばき実行して貰ひたい。そのためには少なくとも結社の自由とか、言論の自由とかいつたつて、自由の範囲をその意味において多少制限制限せねばならぬと考へられる。つまりさういふ勢力の新結成を許すまでの結社の自由、言論の自由は許されない。⁽⁵³⁾

民主人民戦線の試みは、社会党と共産党の対立に加え、主唱者の山川の病気もあり、目立った成果も上げられずに結局、雲散霧消となった。しかし、如是閑とマルクス主義者との共闘が、直ちに途絶えたわけではなかった。1949年1月、如是閑は大山郁夫・野坂参三と『中央公論』誌上で鼎談をしている。話題は多岐にわたるが、如是閑が末尾付近で、「今後どの国家が、どういう理由で戦いを始めても、日本はそのいずれにも荷担しない」と述べ、党派に依らない「全国的」な平和運動の必要性を説いているのが目を引く⁽⁵⁴⁾。他に注目すべきは、如是閑の以下の発言である。日本人は数千年来の政治に無関心だったゆえに、「自分たちの政治を持ち来たそうと努力すべき時に、自覚も足りなければ、

意思力も足りない」。したがって、「ソヴェトが短期間以やつたやうに、組織的な、科学的な方法によつて、日本人をつくりなおす必要があるのではないかと思う」⁽⁵⁵⁾。

よく知られた「敗けに乗じる」でもあまり論及されない後半部分において、如是閑は述べていた。「自由主義」や「民主主義」を単なる知識ではなく「一般の常識」にするための方法として、如是閑は明治初期の岩倉使節団のような大規模な研究調査団の派遣を提案する。すなわち、「政治、経済、文化の各界」において「日本自体」に関する「認識、識見、知識」および「精神をもつた壮年の人々」を欧米に大量に派遣し、「客観的、科学の調査研究」に従事させるべきである⁽⁵⁶⁾。そして、精神文化の面で第一線に立つ彼らが国民を「教化」することで、西洋近代に由来するこれらの観念は、日本人の「一般の常識」となる。座談会での先の発言は、マルクス主義者に向けたリップサービスではなかったのである。

5. 国内冷戦による分断

しかし、如是閑とマルクス主義者との連帯は、長くはつづかなかつた。アメリカとソ連の評価をめぐる、両者の隔たりは次第に大きくなり、それはやがて決定的な対立となってゆく。

座談会「二十世紀思想の性格と展開」(『世界評論』1950年1月)の最終盤で、如是閑はアメリカなどの「ブルジョア国家では、政治的自由がつよく主張されていて、それがかなり国家的に認められているのに反し、ソビエト国家ではぜったいに政治的自由がない」のはなぜかと問うている。ここでの「政治的自由」とは、国家の行動に「その理念の反対の立場から批判することの自由」であるが、羽仁五郎はC.ピアードを引き合いに、アメリカでは「形式的」に認められているに過ぎず、「実質的には、人民大衆は何ら政治的自由をもっていない」と反論する。如是閑も負けじと応酬する。ソ連は「政治的自由を獲得する運動の自由」さえ認めない「独裁形式」の「旧国家形態」である。すると今度は、

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

宮本顕治が羽仁の援護射撃をする。「あらゆる資本主義国家が鋭く爪まで武装して、社会主義国家、人民民主主義国家に対立している」ため、「社会主義国家権力」は必要である。さらに、ソ連の選挙で投票率が90%以上であることは、「資本主義国よりも政治的関心と自由が人民大衆にある証拠」である⁽⁵⁷⁾。議論は平行線を辿ったが、座談会の掉尾において、宮本は統一戦線の問題に触れつつ、「日本の場合、リベラリストのかたたちは、植民地化の危険とファシズムに対して闘うということについて、もっと、確信と勇気が要請されているのではないか」⁽⁵⁸⁾と切言する。

宮本の発言からは、マルクス主義者とともに「植民地化の危険とファシズムに対して闘う」気概に欠く「リベラリスト」に対する不満が窺えるが、座談会で眼前にいる如是閑にも、おそらく批判の矛先は向けられていた。中野重治はより直截に、如是閑は「思索的な衣」を身に纏った「陰湿なデマゴグ」であり、「日本という「世の中」を、外国の奴隷となる方へ実地に「引きずり廻わ」している」と糾弾する⁽⁵⁹⁾。中野の憤怒のきっかけは、東京新聞に掲載された如是閑の「凡人主義と英雄主義」であった。その経緯については以前詳しく論じたので、繰り返さない⁽⁶⁰⁾。ここでは、中野をもっとも怒らせたであろう、如是閑の言葉を紹介しておく。知識人は「従順」よりも「抵抗」に「観念的の興味」を抱くため、彼らはしばしば「扇動政治家」に付け込まれることになる。こう前置きしたうえで、如是閑は次のように断定する。

左翼的の政治家の手に乗る知識人の多いのは、そのせいである。日本人は、いわゆる政治性に乏しいという短所も手伝って、〔中略〕動物的な群集心理のために扇動家の道具にされる恐れがある。日露戦終戦当時の焼打事件のようなこともあった。いまも学生の一部や農民青年の一部が左翼運動に躍らされるといったようなこともある。⁽⁶¹⁾

如是閑を苛立たせたのは、学生運動の左傾化とそれを「煽動」する共産党の存在であった。ここで「学生の一部」が「左翼運動に躍らされる」としているのは、掲載時期から推定して、京大天皇事件を指していると思われる。天野

貞祐と野上彌生子との鼎談でも、「あの学生運動は誰かがいずれ煽動したのでしょう」⁽⁶²⁾と共産党の関与を暗に批判していた。「まだ国家、世界、人類のことなど判断する実力も資格も責任もない徒弟時代」には、大それたことを考えて「社会人的軌道——世代の秩序——から脱線」してはならない⁽⁶³⁾。それは学生個人の問題ではない。復興途上の日本にとっても同様である。如是閑の小論が発表されたのは、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約の締結により、冷戦下での「自由主義陣営」へのコミットが明白となった、わずか3か月後であった。「反共意識」が透けて見える「保守」的な説教を滔々と説く如是閑に対し、「対米従属」という形での日本の「植民地化」に加担する「陰湿なデマゴグ」と中野が共産党員の立場から非難したのは、その妥当性は措くとしても、無理もなかった。

如是閑がアングロ・サクソン文明の実際のおよび実践的な性格に惹かれ⁽⁶⁴⁾、そのことがアメリカへの好意（その裏返しとしてのソ連に対する厳しい評価）につながったという一面は、確かにある。とはいえ、彼が「親米・反ソ」の立場を自覚的に選び取り、いわゆる「対米協調路線」を全面的に肯定したのかというと、必ずしもそうではない。たとえば、本章の冒頭で紹介した座談会では、共産主義の是非は論じておらず、「旧国家形態」に基づく独裁的な政治体制であることが、ソ連批判の主眼であった。別の座談会でも、「思想としてのコンミニズムと、ソ連で実現した政治現実としてのコンミニズムとは、どうも一つにならない」という和辻哲郎の見解に同意し、「ソ連の共産主義は、ありやあ政治がいけません。ソヴェート国家がいけない」と発言している⁽⁶⁵⁾。そもそも、米ソの冷戦を資本主義と共産主義のイデオロギー対立とする理解を、如是閑は否定していた。「現実政治の面に於て、「主義」とは別の国家的対立により、共産主義側は攻撃の心理から、資本主義側は防御の——というよりは、むしろ恐怖の——心理から、互に両立すべからざるものと錯覚して、「冷たい戦争」をつづけて来た」⁽⁶⁶⁾というのが、彼の冷戦に関する認識であった。そして、講和問題をめぐって「全面講和」か「片面講和」で二分する国内世論を余所に、ソ連が反対するから「全面講和は不可能だ」と決めつけて事足りりとする言論界の

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

「退避態度」を、如是閑は厳しく批判した。「政治家」の「現実」的判断を、むしろ否定するわけではない。だが、「評論家」は「現実政治に対する批判的態度」から「現実政治を超越して考察しなければなら」ない。「みな評論家が現実政治家になつてしまつている」現状に、如是閑は警鐘を鳴らしたのである⁽⁶⁷⁾。戦後日本の「保守政治」への無自覚な追従でも、ましてや「親米一辺倒」だったわけでもなかったのである。

しかしながら、中野重治にとって、如是閑は我慢ならない存在となっていた。中野が次に槍玉に挙げたのは、1953年の暮れに開かれた座談会「新しい年の教壇」である。読売新聞本社主催で、如是閑の他、小汀利得（中央教育審議会委員）、高瀬荘太郎（参議院議員、元文相）、島田孝一（早稲田大学総長）、国分一太郎（児童問題研究家）が参加した。この座談会では、国分一太郎が孤立する場面が目立つ。「基本的人権という考え方を子供に養わせること」を疎かにすると「民主主義教育」が崩壊するという国分の危機感に対して、「そんなことはない」（小汀）、「社会があつて始めてそこに権利がある」（高瀬）と、他の参加者はにべもない。如是閑も「基本的とか人権とか強調するのはドイツ式」のイデオロギーで、根本的に間違いだと一蹴している。また、「政治的に中立性をもたなければならない」教員組合が「非常に政治的色彩をもっている」という元文相高瀬の論難を受け、国分は「政府の政策がむしろ教育基本法を守って教育活動をしようとするにたいして圧迫を加えるような空気が出て来ている」と反論するものの、全く賛同が得られない。それどころか、「平和憲法維持だ、再軍備反対だ」という声をあげなければならんということは教育者として間違っている」（小汀）といわれる始末である。そして、「子供には絶対に政治意識をもたせないほうがよい」と如是閑が駄目押しをしている⁽⁶⁸⁾。四人で「一人の国分一太郎を相手にしてさんざんこれを小づきまわしている」この座談会が孕む「政治性」について、中野は以下のように断罪する。

新聞というもつとも大きな言論機関が、ある程度くつわを並べて、平和擁護論、憲法擁護論、民主主義擁護論を馬鹿にしはじめたこと、〔中略〕全体として、戦力

なき軍隊とか、法の現行運用の権威とか、憲法の改悪、軍隊の創設とかいうことについて、疑問も何も出ぬように国民の感覚を統一して鈍麻させてしまおうとしていること、こうして、日本の植民地化・隷属国化を精神的に仕上げようと組織的にのりだしてきていることが大きな問題だと私は思う。⁽⁶⁹⁾

ところで、座談会の掉尾では、文教懇話会が話題になっていた。座談会の2週間前、「青少年の精神作興を主眼とする「新文教政策」の樹立」を目指す吉田茂首相が、文教懇話会に出席して委員の意見を聴取するという報道があった⁽⁷⁰⁾。この文教懇話会は吉田首相の私的諮問機関である文教審議会として1949年5月に発会、翌50年4月に文教懇話会と改称された。如是閑は和辻哲郎らとともに発会当初からメンバーであった⁽⁷¹⁾。如是閑と吉田茂との関係については不詳のことも多いが、少なくとも戦後には深く交際していたことは確かである⁽⁷²⁾。同世代で親英米派である二人が意気投合したとしても、何ら不思議ではないだろう。盟友の馬場恒吾とともに吉田と新聞紙上で鼎談していることから⁽⁷³⁾、その親密な間柄が窺える。「政治嫌い」の如是閑が文教懇話会の世話人を引き受けたのも、思想信条というよりも個人的な情誼からと思われる。

だが、保守政党の総裁でしかも現職の首相と親しく交際することは、如是閑の意図如何に関わりなく、それ自体きわめて「政治性」を帯びた行為であった。少なくとも、マルクス主義者の反感を買うには、充分であった。憤激したのは中野重治だけではない。細川嘉六の如是閑評もまた辛辣である。第3章で引用した回想のつづきで、彼は述べている。

長谷川氏は一九三〇年頃シンパ事件に関連して、一度警視庁に呼び出されてからというもの、すっかり反動の仰せどおり転向していたのであって、貴族院議員に任命されたり文化勲章とかを頂かされたりするほどの、反動のための価値をもっている。私も終戦後、彼の立直りを期待していた一人であるが、その期待に応えてくれなかったのは、甚だ遺憾である。これは明らかに、人民大衆のために、それこそまったく良心的な故河上肇先生と大山郁夫先生に対し、まことによき対称であり、わが国知識人へのまことによき鑑である。⁽⁷⁴⁾

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

如是閑と細川は互いに見知った関係であった。戦前には大原社会問題研究所で顔を合わせており、戦後当初は民主人民戦線とともに世話人を務めた。河上肇と大山郁夫は、雑誌『我等』とともに立ち上げた如是閑の「同志」であり、マルクス主義を深く信奉していた人物でもあった。河上と大山を引き合いに如是閑を腐すあたりに、細川の「政治的立場」を窺い知ることができよう。それと同時に、マルクス主義との関係を再び断った如是閑に対する、底知れぬ敵意も垣間見られるだろう。帝国日本に飼い慣らされ、「帝国主義的なものにたいする弱さ」を抱えた「労働者階級」と結びつかない「自由主義」⁽⁷⁵⁾。如是閑の思想的立場について、中野重治はこう吐き捨てた。細川もほぼ同様の判断をしたことは、彼の発言からも間違いあるまい。

如是閑は「人の議論を相手にとつて突つかゝつていつたり人の意見を問題として自分のものを書くといふことは絶対にしない」⁽⁷⁶⁾と心に決めていた。彼にもむろん、言い分はあった。社会認識の一つの方法として、マルクス主義を排斥したわけではない。だが、マルクス主義はそうした方法論の次元にとどまらず、「原理的に異なった世界観の存在を認めない、排他的な全体的イデオロギー」として「支配を目指す高度に政治的な思想である性格」を帯びている⁽⁷⁷⁾。思想の自由を何より重視した如是閑には、それは到底容認できなかつた。共闘はむろん、対話の道も閉ざされた。冷戦の根本原因をイデオロギーの相違と見なして「二つの世界」の分断を固定化する発想を、如是閑は力を込めて否定していた。しかし、皮肉なことに、「国内冷戦」⁽⁷⁸⁾における保守と革新のイデオロギー対立に、彼は飲み込まれてしまったのである。

6. むすびにかえて

1930年代初頭の数年間、如是閑はマルクス主義と至近距離にいた。秋田雨雀らと深く交わり、日ソ文化交流に情熱を傾けた。当時の共産党からは「同伴者」と目され、非マルクス主義者には「マルクス主義の同類項」と冷ややかに眺められていた。しかし、如是閑自身はマルクス主義への違和感を拭い切れず、

官憲の圧迫もあって、マルクス主義と「決別」した。「大東亜戦争」の敗戦後、マルクス主義が復権したことを受けて、如是閑とマルクス主義者は民主人民戦線をはじめとする共闘を試みたものの、「国内冷戦」に翻弄されて結局、「反共」知識人として如是閑は「自由主義陣営」に組み込まれた。

ところで、マルクス主義者は一貫して、如是閑を「自由主義者」として遇してきた。多田道太郎は「日本の自由主義」（1965年）で、如是閑について、「彼はどこからみても、どこをとっても自由主義的であった。自由主義の「原点」にいたとほとんどいいたいくなる」⁽⁷⁹⁾と規定している。ここでいう「自由主義」とは何か。「みずからは「絶対の真理」をたてない。同時に他からの限定をきらう。あらゆる主義について自由でありたい。そして自由主義者と呼ばれることにさえ反対する。ここに日本的自由主義および自由主義者の思想の核心がある」⁽⁸⁰⁾。多田の理解に従えば、「ノン・イズミスト」を自任した如是閑は、まさしく「自由主義的」である。

では、「原点」とは如何なる意味であろうか。多田は「獲得——無為」を縦軸に、「抵抗——遵法」を横軸に設定し、**図1**のような座標軸で「日本の自由主義」を整理している。縦軸は「時間」の観念に関連する。「獲得の自由」派は、歴史の進歩を信じて、自己の「真の意志」の実現や自己支配を求める。反対に、「無為の自由」派によれば、「ひとがおのれの欲するままにおいてすでに自由である」⁽⁸¹⁾。前者が積極的自由、後者が消極的自由にそれぞれ対応するといえよう。横軸は「空間」の観念に関わる。「抵抗の自由」派は「開かれた社会の普遍理性を重視」するのに対し、「遵法の自由」派は「閉ざされた社会の特定秩序」を求める⁽⁸²⁾。このような縦軸と横軸の交点＝「原点」に如是閑がいたというわけである。

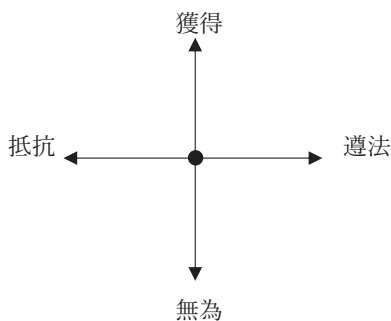


図1 多田道太郎の自由主義理解
【出所】多田「日本の自由主義」43頁。

1932年前後の「アンチ・ファシズム」の共同戦線では、左翼と自由主義者の結節点として、敗戦後の民主人民戦線では、山川均と石橋湛山の仲介役として、如是閑は重要な位置にいた。しかし、「自由主義の軌跡像は、時代とともに少しずつ、あるいは急激に転移する」⁽⁸³⁾。戦中・戦時下は、権力によって、**図2**のように右下へずらされた。如是

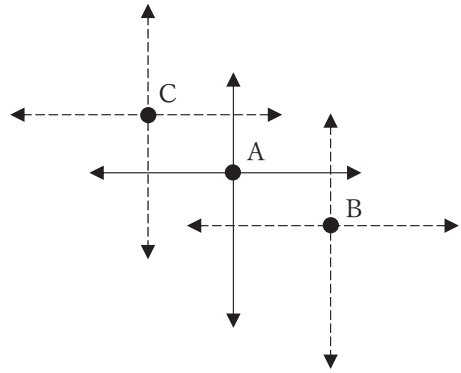


図2 自由主義の軌跡像

【出所】多田「日本の自由主義」43頁を基に、筆者が一部修正した。

閑は「原点」にいることを求め、AからBへと自身の思想的立場を変容させた。その結果、マルクス主義と「決別」することになり、共同戦線は幻に終わった。敗戦によって自由主義の軌跡は元の位置に戻り、それとともに、如是閑は再びAに自らを位置づけた。1933年以前のように、マルクス主義と連帯する可能性が開かれたのは、そのためであった。しかし、如是閑が自由主義の「原点」に居つづけたのは、それまでだった。戦後、論壇の中心を占めた「近代主義者」が、自由主義の軌跡を**図2**の左上へと修正したとき、如是閑はCへ移行することなくAに取り残されてしまったのである⁽⁸⁴⁾。さらに、「国内冷戦」の激流に飲み込まれた彼は、マルクス主義者（とりわけ共産党系）から敵視されることになった。

とはいえ、共産党系の文化人以外との関係は、さほど険悪ではなかった。自由主義の「原点」から外れて以後、如是閑は戦前から活躍する「オールド・リベラリスト」と目され、また言論界の長老格として尊重された。1952年9月、雑誌『改造』の特集で、如是閑は馬場恒吾とともに「オールド・リベラリスト」の代表として招かれている⁽⁸⁵⁾。だが、如是閑が数多くの論稿を寄稿した『改造』も、それから3年持たず、1955年2月に廃刊となる。同じ年

の11月には、かつての「同志」で親友の大山郁夫が社会党再統一を見届けて死去、保守合同で自由民主党が誕生し、「五五年体制」が成立する。翌56年4月には盟友の馬場恒吾もこの世を去った。如是閑は傘寿を迎えたがなおも生き永らえ、1969年に93歳で長逝するまで健筆を振るった。生涯現役を貫いた。しかし、幾分の軽蔑を含めて「オールド・リベラリスト」として祭り上げられた時点で、あるいは転移する自由主義の軌跡に付いていけずに「原点」から外れた時点で、長谷川如是閑の「時代」は、おそらく終焉を迎えていたのである。

注

- (1) 大内「オールド・リベラリストの形成 高野岩三郎の一生」(『中央公論』1949年7月) 35頁。
- (2) 同前。
- (3) 同前, 36頁。
- (4) 「疑ひ全く晴れて如是閑氏静かに語る——自己批判を忘れた現代人に“赤”より道徳教育の欠陥」(『東京日日新聞』1933年12月15日)。
- (5) 山領「ある自由主義ジャーナリスト——長谷川如是閑」思想の科学研究会編『共同研究 転向』上(平凡社, 1959年) 334頁。
- (6) 同前, 332頁。
- (7) 山領健二は、新聞の誤植ではなく如是閑が意識的に使用した言葉であると推測したうえで、合理主義にも合法主義にも理解できるあいまいさに注意を促している(同前, 352頁註9)。
- (8) 田中浩『近代日本と自由主義』(岩波書店, 1993年) 327頁。この談話について、田中は以下のように解釈している。「かれは、弾圧につぐ弾圧のなかで、仲間たちにこんごの闘い方を提言しているのではないか。〔中略〕ここで如是閑は、超国家主義やファシズムに抵抗・反対するためするための新しい団結のあり方を模索するよう呼びかけていた、といえないだろうか」。理解に苦しむ。
- (9) この点をめぐって興味深いのは、池田元の見解である。池田は、「如是閑の思想把握および思想展開」を「時代の「表層」に対応する「政治社会的思想」と「基底に一貫して流れる「日本的性格」の二重構造として捉える。そして、いわゆる「転向」説が、「表層」と「基層」とを「同次元に平面的に並べ、時代批判への直接性を基準として評価」している点を鋭く批判している。池田『長谷川如是閑「国家思想」の研究』(雄山社, 1981年) 267-268頁, 傍点原文。

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

- (10) 如是閑とソヴェート友の会との関係については、『長谷川如是閑——人・時代・思想と著作目録』（中央大学、1985年）で指摘されている（同書102, 105頁）。ただ、出典が不明確な箇所が多々ある。また、日ソ文化協会を第一次ソヴェート友の会と並行して存在した別の組織として捉えているが（105頁）、同書も依拠したと思われる安田徳太郎の回顧録には、第一次ソヴェート友の会が改称して日ソ文化協会になったという記述がある（安田『思いだす人々』青土社、1976年、159頁）。安田の長男一郎が著した伝記によれば、『教育』1932年7月号の誌上で、同年5月に第一次友の会を日ソ文化協会と改称したと安田が報告していた（安田一郎著、安田宏編『ゾルゲを助けた医者 安田徳太郎と〈悪人〉たち』青土社、2020年、143頁）。雨雀の日記には、改称の件について明確な記述はなく、判然としない部分もあるが、本稿では安田徳太郎の回想と一郎の伝記に従った。
- (11) 以下、雨雀の日記から引用は、尾崎宏次編『秋田雨雀日記』（未來社、1965～66年）による。引用に際しては、「日付：巻数-頁数」と表記する（例、1932年1月1日条：Ⅱ-279）。
- (12) 安田前掲『思い出す人びと』152-153頁。
- (13) 同前、158頁。
- (14) 同前、159頁。
- (15) 第二次ソヴェート友の会の発会式当日、雨雀はこう漏らしている。「僕にはこの会の責任者たる力はない。避けるのは当然だ。日ソ文化協会との事務を整理しておくように注意しよう」（Ⅱ-310）。
- (16) 雨雀も深く関与したプロレタリア科学研究所（プロ科）において、如是閑は山田風太郎や平野義太郎らとともに、「同伴者グループ」として好意的に見られていた。参照、梅田俊英『社会運動と出版文化』（御茶の水書房、1998年）225頁。
- (17) 梅田俊英は、このときの如是閑の挨拶が「幅広い」研究団体である唯研の枠を超えた「過激」な発言だったため解散となったようであると述べ、その責任を取って如是閑が唯物論研究会を退会したと推測している。梅田「協調会の組織動向——「知的共同体」によせて」（『大原社会問題研究所雑誌』522号、2002年5月）19頁。
- (18) この山内光の「送別会」をめぐる顛末は、川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』（平凡社、2002年）195-197頁。
- (19) 1930年代における「社会の政治化」については、中島重と蠟山政道に即して少し論じたことがある。拙稿「戦間期日本における「社会」と「政治」——吉野作造・

- 中島重・蠟山政道を手がかりに」(『季刊日本思想史』83号, 2019年6月)。
- (20) 山領前掲「ある自由主義ジャーナリスト」335頁。
- (21) 杉山平助「如是閑氏の心境打診【中】 本来は英国風の実証主義」『読売新聞』(1934年4月30日)。
- (22) 同前。
- (23) 杉山「文芸評論の評論——【完】 大衆問答」『読売新聞』(1932年8月10日)。
- (24) 長谷川「大衆文芸・大衆雑誌等に於ける歪められた「大衆」」(『新潮』1932年8月)3頁。
- (25) 柳澤「結婚生活の破綻について」(『婦人公論』1933年5月)52頁。この論稿は、当時メディアを風靡したフェリシタ事件(中野正剛の弟で詩人・画家の中野秀人とスペイン人のフェリシタ夫人との離婚騒動)をめぐって書かれたものである。なお、柳澤の批判への如是閑の反論として、「大陸」から「大島」へ」(『中央公論』1933年6月),『長谷川如是閑集』第二卷(岩波書店, 1989年)所収, 331-347頁。
- (26) 青野「批判者としての長谷川如是閑氏—その支配と意義」(『読売新聞』1931年3月17日)。
- (27) 戸坂『日本イデオロギー論』,『戸坂潤全集』第二卷(勁草書房, 1966年[初出1935年, 増補版1936年])406頁。
- (28) 烏丸求女「日本的と如是閑的」(『読売新聞』「壁評論」欄, 1935年7月11日)。
- (29) 長谷川「一元即多元」(『読売新聞』夕刊, 一日一題欄, 1936年4月30日),『長谷川如是閑集』第四卷(岩波書店, 1989年)所収, 385頁。
- (30) 三谷「時代と如是閑」, 同前, 467-468頁。
- (31) 戸坂前掲『日本イデオロギー論』407頁。
- (32) 長谷川「文化勲章の意義 国民性に順応するもの」(『読売新聞』1937年2月13日)。
- (33) たとえば、『大阪朝日新聞』(1936年11月8日)では、「文化貢献者顕彰を首相閣議で提議 各閣僚, 賛意を表す」という見出しで報じている。
- (34) 細川「書斎の思ひ出(続)」(『思想』1954年6月)114頁。
- (35) 「二七会」については、望月詩史「二七会とその人々——一九二八～一九四四年一」(『同志社法学』384号, 2016年7月)が詳しい。
- (36) 国民学術協会と如是閑の関わりは、山領前掲「ある自由主義ジャーナリスト」335-340頁。戦前の活動については、『国民学術協会の記録 一九三九年～一九九九年』(国民学術協会, 2000年)1-46頁。
- (37) 長谷川「総合による創建【上】」(『毎日新聞』1943年11月12日)。

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

- (38) 長谷川「大東亜文化昂揚の根本義」（『文学報国』1944年11月1日）。
- (39) 青木との会談は『暗黒日記』Ⅰ（評論社、1973年）186頁。町田との会談は『暗黒日記』Ⅱ（評論社、1971年）189頁。
- (40) 長谷川「丸善と私の六十年」（『学鏡』1952年1月）31頁。
- (41) 長谷川「敗けに乗じる」（『文藝春秋』1945年12月）、『長谷川如是閑集』第一巻（岩波書店、1989年）所収、350-352頁。
- (42) 長谷川如是閑・馬場恒吾「新春対談」（1）（『読売報知新聞』1946年1月3日）。
- (43) 長谷川・馬場「新春対談」（4）（『読売報知新聞』1946年1月7日）。
- (44) 長谷川「戦争と文学者の責任」（『人間』1946年4月）174頁。
- (45) 長谷川「日本民族の不合理性」（『新生』1945年12月）7頁。なお、如是閑がここで触れているのは、「ブルジョア国家に於ける軍部の地位」（『時事新報』1931年9月9～17日、8回連載）および「日支関係の『悪化』と帝国主義戦争の停頓」（『改造』1931年10月）。同様の内容については、後に「現代政治の科学的検討」（『速報先見経済』1949年6月）で、より詳細に語っている。堀真清「プランク文庫漫遊——長谷川如是閑の告白と再生にふれて——」（『Intelligence』2002年3月）も参照。
- (46) 長谷川前掲「日本人の不合理性」7-9頁。
- (47) 戦中・戦後における「日本の性格」論については、さしあたり以下の拙稿を参照。「長谷川如是閑——〈生活事実〉としてのナショナリティ」米原謙・長妻三佐雄編『ナショナリズムの時代精神』（萌書房、2009年）所収、195-217頁。および「悔恨共同体」の断層——長谷川如是閑と中野重治——出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』（法律文化社、2015年）所収、203-226頁。
- (48) 長谷川「封建制度と封建精神——近代日本に殃したその余燼——」（『評論』1946年2月）103, 106頁。ただし、如是閑が「封建的意識」を全面的に否定せず、「近代生活の短所を制約する作用」を肯定的に捉えていることは、注意を要する。同時期に、『封建文化』（岩波書店、1947年）を著しており、また戦時下以来、「型の喪失」を論じる際には、封建文化を肯定的に論じている。したがって、如是閑の「封建性」理解についても、池田元が指摘する「表層」と「基層」に即して整理する必要があるが、その作業は他日を期したい。
- (49) 「岩波新書の再出版に際して」（1949年3月）、鹿野政直『岩波新書の歴史』（岩波新書、2006年）所収、378頁。
- (50) 「党派越え職業越えて 人民戦線前進開始 けふ世話人会」（『読売報知新聞』1946年3月10日）、「名は“民主人民戦線” 初の世話人会 直ちに準備委員会へ」（『読売報知新聞』1946年3月11日）。

- (51) 山川・長谷川「人民戦線を論ず」(『改造』1946年3月) 50-51頁。
- (52) 同前, 52-53頁。
- (53) 同前, 62頁。
- (54) 大山・野坂・長谷川「日本民主革命の再検討」(『中央公論』1949年1月) 29頁。田中前掲『近代日本と自由主義』357頁も参照。田中が的確に指摘しており、野坂はここで、仮にソ連が戦争を起しても共産党は絶対に加担しないと力説している。
- (55) 同前, 27頁。
- (56) 長谷川前掲「敗けに乗じる」353-354頁。
- (57) 座談会「二十世紀思想の性格と展開」(『世界評論』1950年1月), 『鶴見俊輔座談 戦争とは何だろうか』(晶文社, 1996年) 所収, 156-159頁。座談会の参加者は、如是閑, 羽仁, 宮本の他, 高島善哉, 久野収, 鶴見俊輔。
- (58) 同前, 162頁。
- (59) 中野「日本の目」(『新日本文学』1952年1~3月), 『中野重治全集』第十三巻(筑摩書房, 1979年), 86-87頁。
- (60) 前掲拙稿「「悔恨共同体」の断層」216-221頁。
- (61) 長谷川「凡人主義と英雄主義」下(『東京新聞』1951年12月3日)。
- (62) 天野・野上・長谷川「国家と道徳」(『改造』1952年1月) 75頁。
- (63) 長谷川前掲「凡人主義と英雄主義」下。
- (64) アングロ・サクソン文明の「現実主義」的態度とドイツ文明の「観念主義」的態度を対置し、前者と日本人の「伝統的態度」を結びつけて論じるのは、如是閑の文化論でしばしば見られた論法であった。たとえば、「ドイツ学からイギリス学へ」(『中央評論』1951年1月), 「明治を思う」(『世界』1953年1月)を参照。
- (65) 座談会「日本の進むべき道」(『改造』1951年10月) 57, 59頁。他の参加者は、金子武蔵, 務台理作, 和辻哲郎。
- (66) 長谷川「主権国家と生活共同体(本論)」(『朝日評論』1950年5月) 12頁。1950年前後の時期、如是閑はこの論稿を含めて「世界国家論」に関する論稿を多く発表し、出席した座談会でもしきりに主張している。そこに見られる「社会」の互助的契機と国家の権力的契機を対比する発想は、「社会の発見」以来一貫しており、如是閑の思想の根幹にも関わる重要な要素である。紙幅の関係上、ここでは指摘にとどめ、別稿で詳しく論じることとする。
- (67) 座談会「講と問題の背後」(『中央公論』1950年1月) 27-29頁。他の参加者は佐藤尚武, 鈴木茂三郎, 蠟山政道。田中前掲『近代日本と自由主義』354-355

ある「オールド・リベラリスト」の軌跡（織田）

頁も参照。ただし、田中はこの座談会で如是閑が蠟山や鈴木木の「全面講和論」に賛成したとしているが、それは不正確である。蠟山は「単独講和か片面講和かという問題の出し方」に批判的であり、将来の理想として全面講和を考えにおくべきだと述べているに過ぎない。如是閑にしても、鈴木木の「全面講和論」に賛同した素振りは見られない。

- (68) 座談会「新しい年の教壇」上（『読売新聞』1953年12月27日）、および同下（『読売新聞』1953年12月29日）。
- (69) 中野「われわれ自身のなかの一つの捨ておけぬ状態について」（『新日本文学』1954年1～3月）、前掲『中野重治全集』第十三巻所収、340-341頁。
- (70) 「新文教政策 吉田首相決意」（『読売新聞』1953年12月14日）。
- (71) 辻田真佐憲『文部省の研究「理想の日本人像」を求めた百五十年』（文春新書、2017年）160-161頁。
- (72) 田中前掲『近代日本の自由主義』でも、如是閑と吉田との関係は、なぜか全く触れられていない。なお、吉田との関係に論及した貴重な研究として、新美貴英「長谷川如是閑研究——政治・外交論を中心に——」（早稲田大学博士論文、甲第4845号、2016年3月）269-271頁。
- (73) 吉田茂・馬場恒吾・長谷川如是閑「日本をよい国に」【上】【下】（『読売新聞』1953年1月1、3日）。
- (74) 細川前掲「書齋の思ひ出（続）」115頁。
- (75) 中野前掲「日本の目」96-97頁。
- (76) 長谷川・馬場「新春対談」（2）（『読売報知新聞』1946年1月4日）。
- (77) 萩原延壽「日本知識人とマルクス主義」（『中央公論』1963年12月）、同『自由の精神』（みすず書房、2003年）所収、52頁。
- (78) 「国内冷戦」の概念とその様相については、坂本義和「日本における国際冷戦と国内冷戦」、『岩波講座現代6 冷戦』（岩波書店、1963年）所収、331-370頁を参照。
- (79) 多田「日本の自由主義」、同編『現代日本思想大系18 自由主義』（筑摩書房、1965年）45頁。多田道太郎の自由主義理解については、根津朝彦「多田道太郎の自由主義」、出原編前掲『戦後日本と知識人の役割』所収、とくに181-189頁を参照。
- (80) 同前、17頁。
- (81) 同前、26頁。
- (82) 同前、42頁。
- (83) 同前、45頁。

- (84) 鶴見俊輔は「自由主義の試金石」(『中央公論』1957年6月)で、「リベラルの合作」について、「リベラル左派(共産党と合作して行く線)」と「リベラル右派」とを区別したうえで、以下のように述べている。「もし、前者を選ぶとすれば、その人が、たとえ共産党員と信条を同じくしない場合でも、多くの点で共産党員にたいして不満と批判と反感さえもっているとしても、そのうける圧力は、合作の戦線の幅全体に相当するものでなくてはならない。ここで、自分だけに相当する圧力のみをうけることをえらんだのでは、合作の線は切れる。そして、そのときすでに、リベラルはリベラルであることをやめるのである。」(『鶴見俊輔集9 方法としてのアナキズム』筑摩書房、1991年、151頁)。この点に関連して、待鳥聡史は近著で、戦後日本の「近代主義」は戦前・戦中への強い反省の上に成立したために「左派への志向と親和性」が強かったと指摘している。すなわち、マルクス主義の知的正統性の高さゆえ、本来ならば「近代主義左派」として「異端」となるべき立場が「近代主義」を代表し、「自由主義を重視する標準的な近代主義」＝「近代主義右派」は傍流に追いやられた。そして、前者は丸山眞男や清水幾太郎ら「戦後知識人」によって代表され、後者は河合榮治郎門下の木村健康や猪木正道らが担い手となった。待鳥によれば、いわゆる「オールド・リベラリスト」は「近代主義右派」の源流であったという(待鳥『政治改革再考 変貌を遂げた国家の軌跡』新潮選書、2020年、69-82頁)。個々の思想と人的ネットワークについての丹念な考察はむろん必要だが、きわめて興味深い指摘である。
- (85) 特集「オールド・リベラリストに対決するジュニア・リベラリスト」(『改造』1952年9月15日)。なおこの特集には、「ジュニア・リベラリスト」の竹内好(1910年生)と中村真一郎(1918年生)に対して、「オールド・リベラリスト」として長谷川如是閑と馬場恒吾(ともに1875年生)、両者の中間世代にあたる杉捷夫(1904年生)と河盛好蔵(1902年生)の計6名が寄稿している。拙稿「戦後日本の「リベラル・ナショナリズム」——長谷川如是閑の視角から」富沢克編『「リベラル・ナショナリズム」の再検討——国際比較の観点から見た新しい秩序像——』(ミネルヴァ書房、2012年)所収、とくに218-220頁も参照。